

まえがき  
「ウクライナ戦争論集」発刊に当たって  
安齋育郎

1940年、東京生まれ。1944～49年、福島県で疎開生活。東大工学部原子力工学科第1期生。工学博士。東京大学医学部助手、東京医科大学客員助教授を経て、1986年、立命館大学経済学部教授、88年国際関係学部教授。1995年、同大学国際平和ミュージアム館長。2008年より、立命館大学国際平和ミュージアム・終身名誉館長。現在、立命館大学名誉教授。専門は放射線防護学、平和学。

2011年、定年とともに、「安齋科学・平和事務所」(Anzai Science & Peace Office, ASAP)を立ち上げ、以来、2022年4月までに福島原発事故について100回の調査・相談・学習活動。

International Network of Museums for Peace(平和のための博物館国相ネットワーク)のジェネラル・コーディネータを務めた後、現在は、名誉ジェネラル・コーディネータ。日本の「平和のための博物館市民ネットワーク」運営委員会幹事。日本平和学会・理事。ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ記憶遺産を継承する会・副代表。

2021年3月11日、福島県双葉郡浪江町の古刹・宝鏡寺境内に第30世住職・早川篤雄氏と連名で「原発悔恨・伝言の碑」を建立するとともに、隣接して、平和博物館「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を開設。

2003年、ベトナム政府より「文化情報事業功労者記章」受章。2011年、「第22回久保医療文化賞」、韓国ノグンリ国際平和財団「第4回人権賞」、2013年、日本平和学会「第4回平和賞」、2021年、ウィーン・ユネスコ・クラブ「地球市民賞」などを受賞。

著書は『人はなぜ騙されるのか』(朝日新聞)、『だます心だまされる心』(岩波書店)、『からだのなかの放射能』(合同出版)、『語りつごうヒロシマ・ナガサキ』(新日本出版、全5巻)など100数十点あるが、最近著に『核なき時代を生きる君たちへー核不拡散条約50年と核兵器禁止条約』(2021年3月1日)、『私の反原発人生と「福島プロジェクト」の足跡』(2021年3月11日)、『戦争と科学者ー知的探求心と非人道性の葛藤』(2022年4月1日、いずれも、かもがわ出版)など。

このエッセイ集は、2022年2月に勃発したロシアによるウクライナへの軍事侵攻(ロシアによれば「特殊軍事作戦」)に関わって、著者が「平和友の会」(立命館大学国際平和ミュージアムを拠点に活動する市民ボランティア団体)の会報のために書いた「世相裏表」の原稿を中心とするもので、中には、この問題に関する「平和友の会」の学習会(2022年4月29日)の講演資料として書いたものや、5月3日に京都の円山公園で開催された憲法集会での挨拶なども含まれている。

筆者がこのエッセイ集をまとめる気になったのは、今次「ウクライナ戦争」に関する日本での報道が真理にも西欧マスコミ主導の偏りがあり、「ロシアたたき」と「プーチン・バッシング」に傾き過ぎていると感じたからであり、この戦争の原因を作ったNATO、とりわけアメリカの責任が世上あまり認識されていないと思ったからである。しかも、ロシア軍の蛮行として報道された「ブチャの大虐殺」も、実際にはウクライナ軍が起こした事件であり、事実の報道に関しても看過し得ないほどに西欧側のバイアスがかかっていると感じていたからでもある。

筆者はロシアに肩入れしているわけではなく、ただ正確な事実関係をもとに判断したいと願っているだけだが、日本のネット環境ではロシア側の情報にはアクセスできないので、本論集では、ノーム・チョムスキーやオリバー・ストーンやジョン・ミアシャイマーなどの「正直な」アメリカの知識人の事実認識や、ウソをついても何の得もないアメリカの元軍人や元政府関係者などの意見を参考にした。

戦争の情報戦はつきものだが、西欧メディアが圧倒的に優越しがちな「ウクライナ戦争報道」を冷静に見る一助になれば幸いである。